

■ミニシンポジウム3■ 教育・啓発

座長：谷川 恭子（近畿大学医学部附属病院 臨床試験管理センター）

小笠原 美紀（日本大学医学部附属 板橋病院治験管理室）

演者：1. 慢性腎臓病（CKD）専門 CRC の育成と活動

矢野 美幸（ノイエス株式会社）

2. 治験業務に関する薬剤師の意識調査

山口 正和（国立病院機構 東京医療センター 治験管理室）

3. 静岡県立大学大学院薬学研究会における社会人 CRC を含めた臨床研究を担うスタッフの養成について

小菅 和仁（静岡県立大学大学院 薬学研究科）

4. 医師対象『治験推進セミナー』プログラムの検討

兵頭 紀子（関西医科大学附属滝井病院 治験管理センター）

5. 薬剤生早期体験学習における治験業務の理解度向上への取組み

相川 正則（金沢医科大学病院 臨床試験治験センター）

6. 臨床研究支援における新たな人材育成の試み

土井 香（国立循環器病センター 臨床研究開発部）

【報告】

（発表 1）慢性腎臓病に特化した腎疾患の専門 CRC の養成・配置をすすめ 2 年間のうちに 12 名のチームとなった。グローバル試験を考慮し、国外の慢性腎臓病治験専門施設などとの教育連携も視野に入れ、専門性・発展性を追及しているとの発表であった。

（発表 2）薬剤科と治験管理室の連携のため、治験業務に関する意識調査の結果が報告された。臨床現場での治験実施において、薬剤師がその職能を活かし、創薬の両者において患者に貢献することに前向きであり、貢献することが望まれることが示唆されたとの発表であった。

（発表 3）臨床研究を担うスタッフの養成として学生大学院生、社会人 CRC のリカレント教育も含めた CRC/CRA 養成講座「治験・臨床開発持論」を 5 年間にわたり開催した現況報告がされた。今後は受講者のバックグラウンドが多様であるため、社会人を含めた大学院講座では、受講者の多様性を踏まえたカリキュラムの構築が望まれる。

（発表 4）治験責任医師、分担医師のセミナーの受講を必須条件として治験推進セミナーを開催しており、内容と成果の報告があった。基本業務の理解度は高かった。今後は機会は少ないが、重要な業務項目についてもプログラムに取り入れ更なるスキルアップを目指したいとの報告があった。

（発表 5）専門教育を受ける前の早期に臨床の場を体験することによる患者中心、患者本位の立場に立った医療人及び職業観の育成推進のため、薬学生の早期体験学習の成果についての報告があった。年々説明に工夫を加え成果があがっており、将来は、薬剤師として新薬の開発及び治験業務に携わりたいと思えるような薬学生教育にしていきたいとの展望であった。

（発表 6）臨床研究にはじめて関わる臨床研究コーディネーター、データマネージャー、生物統計家すべてを対象に初期研修を行った報告があった。理解度は高く各々の役割と責任を理解することができたという結果であった。

【まとめ】

演題の「教育・啓発」というテーマから、教育の対象が CRC、医師、薬学生など様々であったが、それぞれのテーマで活発な意見交換ができた。医師の教育については現場が直面している問題点やモチベーションをあげる意見まで発展した。また、薬学生に関する発表が 2 演題あったが、薬学部の教育者の立場からの意見もあった。治験において CRC が現実には担っている事が多いが、CRC がすべての対象者に教育を行うことは不可能であるため、色々な立場から教育の提案、コーディネートが出来れば理想である

と感じた。様々な教育・啓発のテーマが今後も継続して検討されていき、更にはその成果を期待したい。



【COLUMN】 全員参加型の会を支援するツール “青色と黄色のページ”

大勢の場では、自分の意見を言うのに勇気が要ります。そこで、意思表示するための工夫として、第6回会議（大宮で開催）から、「プログラム・抄録集」の最後に、“青色と黄色のページ”が付けられることになりました。

例えば、シンポジウム等で座長が参加者に対して、「●●●●●という経験をしたことがある方は「黄色」ページ、経験がない方は「青色」ページをあげてください」と呼びかけると、その場の参加者はどちらかの厚紙を掲げて意思表示をします。

座長と参加者は、あげられた「黄色」と「青色」の厚紙を見て、参加者の意識状況を把握し、それを参考にした議論が進行します。

この方法は、参加者も参加できる良い方法として、第7回以降も継続されています。

